

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年11月1日（木） 13:00～15:30

(2) 場所：鳥取産業会館5階大会議室

(3) テーマ：「多極型のコンパクトなまちづくり
～中心市街地と周辺地域との共栄～」

(4) 進行

13:00～13:05 開会

・開会の挨拶 鳥取市長 竹内 功

13:05～13:20 趣旨説明

・内閣府地域活性化推進室次長 猪熊 純子

13:20～14:20 施策・事例紹介

・鳥取市長 竹内 功
・玉野市長 黒田 晋
・西条市副市長 大越 康史

休憩（15分）

14:35～15:30 パネルディスカッション

・コーディネーター：鳥取環境大学講師 倉持 裕彌
・パネラー：まちづくり会社いちろく代表 常村 護、
用瀬もてなしの心地域づくり推進會會長 竹澤 敏男
タウンマネージャー 熱田 龍二、鳥取市都市整備部部長 大島 英司

15:30 閉会

2. 開会の挨拶

● 今回鳥取市で開催されるこのシンポジウムは中四国では1ヵ所ということで、本日は四国からもお越しいただいていっしょに考えていただくとなった次第だ。パネルディスカッションなどでより立体的に議論が進むことを期待している。

● 鳥取市は市町村合併を通じて20万人を超える都市となったが、それから8年が経過し、人口はだんだん減少傾向にある。そういうことが中心市街地にも影を落としているし、まちづくりが大きくクローズアップされる状況にある。皆さまとともに考えていただけたらと思う。このシンポジウムが中心市街地活性化の有意義な



契機となるよう期待申し上げてご挨拶とさせていただきます。

3. 趣旨説明

- 平成18年の改正新法の施行から6年が経過し、各地においてまちのにぎわいづくりや経済の活性化に向けて様々な取り組みが行われている。国の認定制度も107が認定され、うち8市についてはすでに第二期計画が進展している。このシンポジウムは、そのような時期を捉え、先進的な取り組み事例の紹介、議論を通じて日本各地の活力向上につながる情報を発信、共有しあうことを目的としたものだ。



- 7月に策定された国の日本再生戦略でも中心市街地活性化は重点施策のひとつとして、集約型のまちづくりや次世代型生活への対応を掲げて、現行施策の検証を行うこととしている。本日の鳥取市、玉野市、西条市の3市においては地域の資源を活かした特徴ある取り組みを進めておられる。本日はそういった取り組みをご紹介いただきながら、幅広く意見交換をしていただいて、その検証に活かしていきたいと考える。
- 内閣官房地域活性化統合事務局が行っている施策では、特に先の国会で地域再生法と構造改革特区法の改正が行われた。ほかに経産省では、中心市街地魅力発掘・創造支援事業、中心市街地商業等活性化支援業務等委託費事業がある。国交省では「暮らし・にぎわい再生事業」、「空きビル再生支援」「にぎわい空間施設整備」などがある。総務省では、「中心市街地活性化ソフト事業」「中心市街地再活性化特別対策事業（ハード事業）」の2種類がある。また最後に論点のテーマを出させていただいたので議論に活かしていただければと思う。

4. 施策・事例紹介

(1) 鳥取市

- 9つの市町村が合併した鳥取市は、全体的なまちづくりを考えないといけない。中心市街地活性化と地域生活拠点の再生をめざす「多極型のコンパクトなまちづくり」を目標にまちづくりを進めている。平成19年には現行の中心市街地活性化基本計画を策定した。鳥取市の中心市街地には二つの核があり、城跡周辺地域は、「歴史・文化・自然などの



地域資源を活かし、人が憩う居住・交流の核」、また鳥取駅周辺は「人が集まりモノや情報が行きかう、高度利用を進めるにぎわいのある経済交流の核」と位置づけている。

- 鳥取城跡周辺では駐車場をつくったり、産業会館の移転、わらべ館という文化施設の隣には芝生公園をつくった。登録文化財のビルも再生してランドマークとして存在している。また市有地を活用して住宅地に変えるという実験的取組みも行っている。
- 駅周辺ではチャレンジショップなど空き店舗を活用した支援や駅前アーケードをLEDにするなどきれいに明るくしている。パレットとっとりという商業施設は、施設内に市民交流ホールもつくられ、にぎわいの拠点となっている。
- 25年度から始まる第二期の計画では、目標に「まちなか居住」と「にぎわいの創出」を掲げて取り組む予定だ。たとえば高齢化も進んでいるので、100円バスなどは路線を増やして展開していく。
- 地域生活拠点の面では、たとえば用瀬町では地域再生整備計画で公共交通の強化など安全で安心できる魅力的なまちづくりを進めていく。

(2) 玉野市（岡山県）

- 平成20年に民間の方によるまちづくり研究会、21年に中心市街地活性化協議会が発足。24年に認定を受ける運びとなりスタート地点に立ったというところだ。
- まず24時間眠らない港ということで宇野港を魅力のひとつと考えている。再開発が進んで、飛鳥IIや海洋丸、日本丸などの帆船が来る港になっている。また日照時間も長くメガソーラー発電など自然エネルギーに対する取組みも行われている。
- 漫画「ののちゃん」の作者いしいひさいちさんは宇野港周辺の出身で地元の活性化にも協力いただき、イメージキャラクターとして原付バイクのプレートやマンホールのフタなどにも描かれている。また「瀬戸内国際芸術祭」は2013年にも開かれ、玉野市も会場の一つとして臨もうと考えている。
- グルメ分野では“たまの温玉めし”やげた（舌平目）を利用したシリーズ、また造船所のドックに入港される護衛艦ごとのレシピを提供いただいて自衛隊カレーフェアも行っている。
- 人口減少対策や高齢化対策を中心に、生活利便性の高さや資源・景観の良さを活かし、居住人口の増加や高齢化に対応したまちづくりをコンセプトに再生に向けた取組みを進めているところである。



(3) 西条市（愛媛県）

- 農業のまちというところに注目をしていただき昨年、経団連の未来都市モデルプロジェクトの実証地域に選定され、農業革新都市として各企業が参画している。総合特区としても選定されている。
- 地域的には中心市街地にある新庁舎が建設中で、太陽光パネルを設置したり、西条市の象徴である水を使った水のモニュメントを設置。様々な箇所には林業活性化の意味で木を使っている。都市計画マスタープランとして、旧西条市を都市拠点とし、各地域拠点を公共交通機関で結んでいくという拠点連結型都市構造を目指している。
- 中心市街地では、「西条紺屋町商店街整備事業」としてアーケード商店街のシャッター店への取組みや駅周辺の整備、さらに文化の中心となる総合文化会館、産業の中心となる産業情報支援センター、西条図書館、福祉センターなどがある。
- 大きなテーマとして「元気と賑わいのある交流空間の創造」「水と共生した快適な居住空間の創造」を基本的な方針として様々な施設について整備を進めていこうとしている。また広場や芝生空間をつくるなど防災面での強化も図っている。



6. パネルディスカッションの概要

- (コーディネーター) まずはまちづくりで感じている課題や連携の仕方などについてお話しいただけたらと思う。
- (常村代表) 智頭街道商店街の“ちずちづ朝市”は、鳥取総研という財団法人のスタッフの方に智頭町と連携した軽トラ市をやらないかという提案を受けて始まった。顔なじみができてるし、町の熱意で続いているといえる。
- (竹澤会長) いちばんやらなければと感じているのは、一昔前は何でも行政に依存という時代だったが、今は自分たちでやっていかなければと思っている。半面、行政の方には地元やボランティアを頼りにし過ぎてもどうかと思う。目的や背景などを見極めてご判断いただきたい。また呼びかけに苦勞する部分があるので、きっかけづくりや働きかけをやっていただくと我々も取組みやすい。
- (熱田タウンマネージャー) 民間と行政のつなぎ役をしてきたが、行政の仕組みなどが分からなく苦勞した。大事なのは、いかに市民の輪っかの中に入れてもらうか、また行政の中の輪っかの中に入れてもらうかという“信頼”の部分大きい。その中で「若桜往来マルシェ」や「鹿野街道祭り」、「いなばのお袋市」などの事業に取り組んできた。

- (大島部長) 鳥取市としては、住みたいところに安心して住み続けていただくために、拠点と公共交通は常にセットという考え方に立っている。中心市街地と地域生活拠点、それを結ぶ路線の整備が並走している状況だ。我々としても施策の編集能力を高めていければと思う。
- (コーディネーター) 次に、これから先のまちづくり、あるいは中心市街地と地域生活拠点との連携などについて伺えればと思う。
- (常村代表) 今年の朝市の折に智頭町の方から、森の自然の中で子供を育てる森の幼稚園が人気を集めているが、その写真を朝市で展示させてくれないかという提案をいただいた。5日間ほど展示したが、これぞコラボ。将来に向けての考え方のきっかけになるのでは。
- (竹澤会長) 中心市街地を元気にするのは、中心市街地に住んでいる方はもちろんだがその周辺部の方々の力であるとか影響が大きいと思う。周辺部からどんどん情報を発信しているいろいろなグループが手をつないでいるんなことに取り組んでいく。そうすることで新しい施策が出てきたり、人の輪が広がっていく。さらに情報収集能力や調整能力のある行政の仲立ちが重要になってくる。
- (熱田タウンマネージャー) まず基本は口コミなんだろうと思う。それを発信する人がいかに面白いのか、これが大前提じゃないか。またどうすれば交流の質が高まるのか。いちばん大きなのは人との出会い。郊外の方との連携をつくることで新たな出会いが生まれてくるし、新たな情報ルートができる。誰でも自由に参加できる場を継続的に作り続けていく、またそのためのコーディネーターも必要だ。
- (大島部長) じつは今日のシンポジウムやそのための準備も、出会いの活性化という思惑が市役所にあったりする。今後人口は増えず、高齢化も進むが、地域地域に広がっている人たちを結ぶネットワークは増やせるのではないかと考えている。
- (コーディネーター) このシンポジウムの場そのものが、いろんな地域をつなぐ壮大な仕掛けになっていたと気づいた。我々パネリストだけでなく、今フロアにいる皆さまの間でも連携ができれば。それによってこのシンポジウムがさらに意義深いものになるのではと思う。



7. 閉会